

# 覚醒する自己

## ——四川省郊外の客家意識

かわい ひろなお  
民博 機関研究員

客家とはよばれる人びとは、最近、日本でもだいぶ知られるようになった。彼らは、漢民族の一員であるが、独自の言語と文化をもつ集団であるといわれる。二〇〇八年に土楼という円形ドーム型の集合住宅がユネスコの世界文化遺産に登録されたから、その住民である客家の知名度はますます高まった。客家はおもに中国の東南部に住むが、そこから国内外の各地に移住している。筆者は昨年、成都にある客家の街を訪れた。

### 客家の街

成都は、中国西南部にある四川省の省都である。四川省といえば三国志、四川料理、バンドで有名などところだ。四川省には、四川語を話す漢族やチベット系の少数民族などがおもに住んでおり、客家は少数派である。だが、現代中国に影響をおよぼした人物のなかには四川省の客家がいる。鄧小平や朱徳はその代表である。四川省の客家は省の東南部に集中している。ただし、成都の都心から約十数キロメートル離れた東山の一带にも客家の居住

地がある。特に、その洛帯鎮というところでは、近年、客家をモチーフとした街づくりをおこなっている。ここは今や成都における観光地のひとつとなっている。

### 文化資源としての客家

洛帯鎮に着くと、週末でもないのに大変な混雑ぶりであった。門をくぐると観光用に整備された街並みが姿をあらわす。この光景は中国東南部の客家の街とは異なる趣がある。大通りを歩いていくと、街なかには客家の二文字を看板とした店が並んでいる。店を覗いてみると、白鳥の卵や、涼粉というきし麺にも似た麺類が、客家料理としてあちこちで売られていた。食べると驚くほど辛い。中国東部の客家の街では食べたことがない。地元の人に聞くと、これは「悲しみの涼粉」（傷心涼粉）というらしい。四川省にどこでもある「涼粉」をベースとし、涙が出るほど辛くした創作料理であるとのことだ。

大通りから外れて路地裏を歩いていくと、突如として円形の大きな建物があらわれた。

合ったシンボルを造らねばならないというのである。客家を用いた街のイメージづくりは、もはや食品や建築物にとどまることはない。洋服、ピアノ、工芸品、パンダのぬいぐるみまでが、客家の名のもとで売られていた。

### 客家としての覚醒

洛帯鎮に行つて「あなたは客家か」と聞くと、今なら、ほとんどの住民が首を縦にふるだろう。しかし、現地で話を聞くと、彼らが客家ということばを知ったのはじつは最近のことなのだそうである。彼らは二〇年ほど前

まで、「広東人」などと自称していた。だが、一九九〇年代に入ると、彼らは客家として学者たちに「発見」されるようになった。二一世紀に入り、町役場が観光化を進めると、学者たちは客家を利用した街並み保存のプランを提示した。そして、客家を使った大掛かりな街づくりが進められていくうちに、地元住民は客家としての自覚をもつようになったのだという。

中国では近年、民族集団の特殊性を利用して、都市のイメージづくりをすることがある。成都でもまた、客家というブランドを用いて

土楼であった。土楼はもともと、中国東南部の限られた地域にしかない集合住宅である。四川省にあるはずがない。よく見ると土楼をデザインとして着工されている模造建築であった。ここは客家の街だから、それに見

中国内外の観光客を集め、収益をえる戦略を推進している。成都において客家は、外部からもち込まれた利潤追求の道具であった。東山一带における住民の客家意識は、その一環として後に喚起されたものである。客家としての覚醒は、このように現代の政治経済情勢と切り離して考えることはできない。客家の自己意識の形成を理解するためには、社会状況の変化との関係に着目してみる必要があるだろう。



土楼型の建築物



洛帯鎮の店舗



四川客家の観光用人力車



洛帯鎮の街並み